雪国の美しい森：美人林

里山科学館 越後松之山キョロロから数分歩くと、約 3000 本のブナが空に向かって細長く伸びている林がある。この幽玄な風景は「美人林」と呼ばれ、半世紀弱にわたって写真家や自然愛好家たちを魅了してきた。

日本のブナは、涼しい気候の中で育つ高山植物である。本州中央部では、標高約 1,000 メートル付近から生育する樹木である。5～7 年ごとに大量の種子（ブナの実）を実らせるが、発芽した種子のほとんどは、光を遮る老木の樹冠の下で枯れてしまう運命にある。では、標高わずか 300 メートルほどの山肌に、なぜこれほど大きさも形も同じブナの木が密集しているのだろうか？十日町の多くのことと同様、答えは雪に関係している。美人林のブナがこの標高の低さで育つことができるのは、十日町の長い冬と豪雪が高山に似た環境を作り出しているからだ。加えて、雪は競合樹種の生育を制限するが、ブナの秋の種子を春まで湿らせ、空腹のネズミから守る。

ブナの幹が異常にまっすぐで細いこと、同じような大きさであることは、この地域の歴史の産物である。かつてこの地域は、大きさも樹齢もさまざまなブナの自然林だった。1910 年代、この土地の所有者は東京に引っ越す資金が必要だった。彼は成木をすべて伐採し、炭にして売ることにした。翌年の春、残った苗木は日光を得るための競争相手がいなくなった。ブナは向光性で、光合成に必要な光に向かって成長する。周りに背の高い競争相手がいないため、若木は横に伸びたり枝を伸ばしたりする必要がほとんどなかった。彼らはまっすぐに伸び、柳のように一体となって太陽に向かって伸びた。住民たちはこの林に魅了され、風光明媚な場所として保存してきた。

美人林の中には、土から斜めに伸びた後、空に向かってまっすぐに伸びる木もある。雪国でよく見られるこの現象は、「根曲り」と呼ばれる。毎年冬になると、まだしなやかな苗木に重い雪が押し掛かり、その重みで曲がってしまう。雪が解けると、木は再び上に向かって成長するが、このサイクルが何年も続くと、J 字型のカーブが幹の一部となって定着する。伝統的に、地元の木工職人たちはこのネマガリ材を使って、自然のカーブの強さを生かした屋根梁や雪道具を製作してきた。

ほどよく整備された木陰の遊歩道が、3 ヘクタールの森の中をぐるりと回っており、美人林は暖かい季節に訪れるには快適な場所だ。冬は、地面の露出が限られ、雪に覆われた景色が広がるため、スノーシューの人気スポットとなる。